

はじめに

- ・豊臣(羽柴)秀長のイメージ
 - 「秀長は思慮深く温厚の君子であった」
 - 「秀長は温厚の資をもってよく太閤を助け、その偉業をなさしめたのであった」
 - 「秀長は寛仁大度の人で、よく太閤の欠点を補った」
- 渡辺世祐『豊太閤の私生活』(大阪創元社、1939年、のちに講談社学術文庫、1980年)
- ・藤堂高虎の伝記『聿修録』 文政元年(1818)
 - 「人となり温恭にして長者の風あり、関白、法を用うること過厳なり、毎に寛仁をもってこれを救い、諸侯倚頼す」
- 当時の史料によって裏づけられたものではない
- ・谷口克広『織田信長家臣人名辞典 第2版』(吉川弘文館、2010年)
 - 「羽柴長秀」(羽柴秀長)
 - 「秀長は冷静沈着、寛仁大度の人物で、人望も厚く、兄の代理をよく務め、兄の天下統一事業を助力して重要な役割を果たした」
- ・豊臣(羽柴)秀長の実像を秀吉がつくろうとしていた家に視点をおいて考えてみる
 - 木下家 羽柴家 豊臣家
 - 秀吉が関白任官後 豊臣氏(姓)を得てから
 - 家を継続させるため 後継者をさだめる必要性
- ・同時代の人びとが記した文字史料(古文書・古記録など)を中心に

I 秀吉と母大政所と秀長①

- ・秀吉と母大政所と秀長
 - 『太閤記』 寛永2年(1625)序 小瀬甫庵
 - 「父は尾張国愛智郡中村の住人、竹阿弥とぞ申しける、ある時、母懷中に日輪入りたまうと夢み、すてにして懐妊し誕生しけるにより、童名を日吉といいしなり」
- 秀吉の父 尾張国愛知郡中村 竹阿弥
- 母の懷中に日輪 懐妊 誕生 日吉
- 秀長の素生は記されていない
 - 『太閤素性記』 寛永2年(1625)から延宝4年(1676)の間
 - 「尾州愛知郡の内に上中村・中々村・下中村という在所あり、秀吉は中々村にて出生」
 - 「天文五丙申年正月朔日丁巳日の出とひとしく誕生く幼名猿、あらため藤吉郎」
 - 「父は木下弥右衛門という中々村の人」「秀吉母公も同国ゴキソ村という所にうまれて、木下弥右衛門に嫁す」
 - 「大和大納言、幼時、竹阿弥子たるによりて小竹といいし」
 - 「太閤種の別の弟は童名小竹、のち羽柴美濃守(大和大納言と称す)」
- 秀吉の父 尾張国愛知郡 中々村 木下弥右衛門
- 母 尾張国ゴキソ(御器所)村
- 天文5丙申年(1536)正月朔日 日の出 猿 藤吉郎
- 秀長の父 竹阿弥 小竹
- ・母大政所の没年から考えてみる
 - 興福寺多聞院の日記『多聞院日記』天正20年(1592)7月25日条
 - 「去る二十二日暁、大政所死去すと云々、七十六才と云々」
- ・天正18年(1590)12月吉日 伊藤秀盛願文写(『桜井文書』)
 - 「関白様 酉の御年 御年 五十四歳

大政所様 丑の御年 御年 七十四歳」

→母大政所の年齢は合致 秀吉は酉年うまれに

・『関白任官記』 天正13年(1585)8月吉日 大村由己

「大坂に勅使を立て、御台をもって北政所に任じ、母儀をもって大政所に任ず」

【史料1】 『関白任官記』

誕生の年月をかぞうるに、丁酉二月六日吉辰なり、(中略)

その素性をたずぬるに、祖父・祖母禁囲に侍す、萩の中納言と申すにや、今の太政所殿三歳の秋、ある人の讒言によりて、遠流に処せられ、尾州飛保村雲というところに謫居をトして春秋を送る、(中略)太政所殿、幼年にして上洛あり、禁中の傍に宮仕えしたまうこと両三年、下国あり、ほどなく一子誕生す、今の殿下これなり、孩子より奇怪のことこれ多し、いかさま王氏にあらずんば、いかでか、この俊傑を得んや、

→秀吉 誕生 丁酉(天文6年・1537)2月6日

→祖父・祖母 萩の中納言

→尾張国飛保村雲(飛保村久野か 葉栗郡)

→王氏(皇胤)

・吉田兼見の日記『兼見卿記』天正13年閏8月26日条

「遊功(由己)」「今度関白官位参内次第を記す」(近衛前久に)御目に懸ける」

→秀吉を猶子にした摂家の近衛前久もみている

→「凡下」の秀吉を関白にすることを公家社会として受け入れるため

・母大政所と子どもたち

永正14年(1517)丁丑 うまれる、実名は不明

天文元年(1532) 瑞龍院(秀吉姉)うまれる(数え16歳)

天文6年(1537)丁酉 2月 秀吉うまれる(数え21歳)

天文12年(1543) 南明院(秀吉妹)うまれたか(数え27歳)

天正13年(1585)7月 秀吉関白任官

母が大政所として史料に登場 大政所=大北政所 関白の母

2 秀吉と母大政所と秀長②

・秀長の没年から考えてみる

『多聞院日記』天正19年(1591)正月23日条

「大納言秀長卿、昨日二十二日に死去すと云々、五十一才」

→逆算すると 天文10年(1541)生まれ

・事典類 「天文9年(1540)3月2日に生まれ」

→幕末に編纂『系図纂要』「天文九年三ノニ生まれ」

「同十九年四ノ二十日薨ず、五十二」

→4月はあやまり

・天正18年(1590)10月日

都状=泰山府君をまつて寿命の延長を祈るとき、たてまつる祭文

「羽柴大納言豊臣朝臣秀長五十一」

・慶長8年(1603)2月12日

徳川家康都状

「征夷大將軍淳和・奨学別当従一位右大臣源朝臣家康」

「家康六十一歳」

→逆算すると 天文12年(1543)癸卯 生まれ

・金地院崇伝の日記『本光国師日記』

「元和二年丙辰卯月十七日巳の刻、大相国従一位源家康御他界なり、御年七十五」
→逆算すると 天文11年(1542)壬寅 うまれ 慶長8年 60歳

・『多聞院日記』を優先すれば

永正14年(1517)丁丑	母がうまれる、実名は不明
天文6年(1537)丁酉 2月	秀吉うまれる(母数え21歳)
天文10年(1541)辛丑	秀長うまれる(母数え25歳)

3 秀吉が関白になるまで

・歴史上(古文書・古記録) 秀長がいつ登場したのか

→『信長公記』(『信長記』)巻7 天正2年(1574) 伊勢長島一向一揆攻め

「木下小一郎・浅井新八兩人懸け向かわれそうろう」 浅井=信長の馬廻

→天正3年(1575)11月 羽柴秀長判物(『高時村文書』)

【史料2】羽柴長秀判物

古橋請け所の儀、式百五十石に相極めそうろう、ならびに政所前々のごとく申し付けそうろう、
井料は、この中のごとくたるべくそうろう、相違あるべからざるものなり、

天正三	羽小一郎
拾一月十一日	長秀(花押)
古橋	
助□□	
淡路	
左京	

羽(柴)小一郎長秀 判(花押) 文書を出している

伊香郡 所領を長浜城主秀吉からあたえられている 武家

→(天正6年・1578)7月23日 羽柴秀吉書状(『黒田家文書』)

「我らおとゝの小一郎」

・歴史上(古文書・古記録) 秀吉がいつ登場したか

→(永禄8年・1565年)11月2日 木下藤吉郎秀吉添状(『坪内文書』)

木下 藤吉郎 秀吉 猿などとして出てくることはない

→(元龜4年・1573年)7月20日 羽柴藤吉郎秀吉書状(『離宮八幡宮文書』)

羽柴 藤吉郎 秀吉

・秀吉 元龜4年中ごろ以降 羽柴名字

→秀長も早くから羽柴の名字 羽柴 小一郎 長秀

・「羽柴」

「そのころ信長の心に叶いのしる柴田修理亮勝家、丹羽越前守長秀とかやいいしかば、その人の名字を一字づつ賜らんとて、丹羽の羽に、柴田の柴をそえ、羽柴筑前守とあらためたまひしとなり」(『豊鑑』 竹中重門 寛永8年(1631)成立)

4 秀吉の関白任官後

・天正10年(1582)本能寺の変 天正11年(1583)賤ヶ岳合戦

天正12年(1584)小牧・長久手合戦 後

→秀吉 天下人へ駆け上がっていく

天下人=軍事指揮権と知行宛行権を保持する人物 官職と連動しない

・天正12年10月2日

「今日筑前守昇進、叙爵少将」(『兼見卿記』同日条)

筑前守=私称 叙爵=五位 少将=左近衛権少将

・天正12年11月22日

「今度筑州三位大納言に任ず」(『兼見卿記』同日条)

従三位 権大納言 公卿(公家のうち三位以上)

平秀吉朝臣 従四位・参議には任官していない(手続きとして必要)

→「当国表ことごとく和睦あい済む」(『兼見卿記』11月17日条)

・天正13年(1585)3月10日

「明日秀吉卿内大臣に任ず」(『兼見卿記』3月9日条)

従二位 内大臣

平朝臣秀吉

・秀吉 羽柴名字 平氏(姓)

・『羽柴秀吉関白宣下次第』(『近衛家文書』)

秀吉が内大臣→内大臣近衛信輔が左大臣

秀吉が右大臣(信長の凶例)ではなく左大臣をのぞむ

→左大臣近衛信輔は関白をのぞむ→関白二条昭実は年内辞職の例なし

「秀吉こいねがわくば関白の詔を申したし」

「凡下の望む職にあらず」

「近衛殿龍山(前久)御猶子となり」「当職はやがてあい渡すべくそうろう」

・天正13年7月11日 二条昭実が関白辞職 内大臣秀吉が関白任官

→内覧の宣旨 従一位 藤原朝臣

→秀吉だけ 近衛名字 藤原氏(姓)

「近衛殿の称号をけがすところは父子の所存庶幾あるまじく」(『羽柴秀吉関白宣下次第』)

・天正13年9月9日

「本姓藤原朝臣をもって、豊臣朝臣に改む」(『押小路文書』)

→藤原氏(姓)から豊臣氏(姓) 羽柴名字

【史料3】『関白任官記』

関白に任ずることゆえありといえども、古き姓をつぐこと、鹿牛の陳跡をふむがごとし、われ、天下をたもちて、末代に名あらんこと、ただ、新たに別姓を立て、濫觴となすべし、(中略)源平藤橘の四姓、その人の器用によりて、一姓一姓これを制するものか、(中略)今また、姓をあらためて五姓となすべきは、このときなり、

・関白を継承する 豊臣氏(姓) 羽柴名字 あらたな家の形成をめざす

→秀長(天正12年9月以降、長秀から秀長 天正11年5月以降、小一郎から美濃守)への影響

『多聞院日記』天正13年8月19日条

「当国は美濃守殿御扶持と云々、今日鷹鳥(高取)城これを渡す」

『多聞院日記』9月2・3日条

「秀吉郡山へ御越し」

「秀吉兄弟、上下五千程にて入られおわんぬ」→大和郡山城主

・『公卿補任』

【史料4】『公卿補任』

天正十四年

関白 従一位 藤秀吉 藤原姓を改め豊臣たると云々

太政大臣 従一位 同秀吉 十二月十九日に任ず

内大臣 従一位 同秀吉 十二月十九日、太政大臣に任ず

権中納言 従三位 豊秀長 十月四日に任ず、十一月五日正三位

参議 従四位下 豊秀長 正月五日に任ず、同日従三位、十月四日権中納言に任ず

従四位下 豊秀次 十一月二十五日に任ず、右中将もとの如し

從四位下 豊秀家 八月八日任ず、左中将もとの如し、今日從三位に叙す

- 秀吉 関白 太政大臣
- 秀長 正月5日 從三位 参議 豊臣氏(姓) 羽柴名字
10月4日 権中納言 11月5日 正三位
- 秀次 11月25日 從四位下 参議 右中将兼任 豊臣氏(姓) 羽柴名字
- 秀家 8月8日 從四位下 参議 左中将兼任 豊臣氏(姓) 宇喜多名字

【史料4】 『公卿補任』

天正十五年

関白 從一位 豊秀吉
太政大臣 從一位 同秀吉
権大納言 正三位 豊秀長 八月八日に任ず、同日從二位に叙す、
権中納言 正三位 豊秀長 八月八日権大納言に任ず、
從三位 豊秀次 十一月二十二日に任ず、同日、從三位に叙す、
参議 從四位下 豊秀次 右中将、十一月二十二日、権中納言に任ず
從四位下 豊秀家 八月八日任ず、左中将もとの如し、今日從三位に叙す

- 秀吉 関白 太政大臣
- 秀長 8月8日 從二位 権大納言 豊臣氏(姓) 羽柴名字
- 秀次 11月22日 從三位 権中納言 右中将兼任 豊臣氏(姓) 羽柴名字
- 秀家 從三位 参議 左中将兼任 豊臣氏(姓) 宇喜多名字

【史料4】 『公卿補任』

天正十六年

関白 從一位 豊秀吉
太政大臣 從一位 豊秀吉
権大納言 從二位 豊秀長
権中納言 從三位 豊秀次 四月十九日從二位に叙す
参議 從三位 豊秀家 左中将

- 秀吉 関白 太政大臣
- 秀長 從二位 権大納言 豊臣氏(姓) 羽柴名字
- 秀次 4月19日 從二位 権中納言 豊臣氏(姓) 羽柴名字
- 秀家 從三位 参議 左中将兼任 豊臣氏(姓) 宇喜多名字

5 聚楽第と聚楽行幸

- ・天正15年(1587)9月13日 秀吉が聚楽第へ移徙(『言経卿記』同日条)
- 秀長も「京都宿所屋渡り」(『天正十五年御神事記』)
- 「大納言殿の屋形」(『鹿苑日録』天正20年9月24日条)
- ・11月晦日 「大納言殿煩い大事とて、今暁郡山内衆ことごとくもって見舞に上洛す」
(『多聞院日記』同日条)
- 秀長の病、大事
- ・12月5日 「ことなる儀なし」(『多聞院日記』同日条)
- 秀長、快復する
- ・天正16年(1588) 聚楽行幸
4月14日 後陽成天皇が聚楽第へ行幸

→これより先 3月27日 秀長・家康・秀次

「清華衆」(『中山親綱卿記』同日条)=摂関家につぐ家格

→秀長・家康・秀次・信雄・宇喜多秀家の5人が「清華衆」に

→「内裏の儀、永代守護」(『多聞院日記』5月4日条)

・『1588年度・日本年報』 天正16年

「関白殿は日本の重立った諸侯の数名を一部屋に集めた。彼らのなかに関白殿の甥の孫七郎(秀次)殿や、彼の弟である美濃(秀長)殿がいたが、関白殿は彼らに一言短い話をし、次のように述べた。余の死にあたってはおそらく汝らのいずれかに日本の帝国と主権とが移行するであろう。」

→家の後継者候補 秀長と秀次

・天正16年(1588) 毛利輝元らをもてなす

7月19日 毛利輝元・小早川隆景・吉川広家が上洛、上坂

→輝元も「清華衆」に これより先 上杉景勝も「清華衆」に

・9月4日 輝元ら郡山へ(『輝元公上洛日記』)

「御迎えとして大納言殿、道五十町ほど御馬をはやめられ御出向きなされそうろう」

→秀長が出迎え

→輝元の宿所「大納言殿御多屋」

・9月5日 御多屋で能

・9月6日 輝元らへ秀長家臣が御礼(あいさつ)、贈り物を遣わされる

→表1

→羽田正親・桑山重晴・藤堂高虎らの名前

・「巳の刻」(午前10時ころ)に輝元ら奈良へ

→「大納言殿御同道」猿沢の池・興福寺・大仏・二月堂・八幡・若草山・三笠山・春日大社

→「御宿成身院」「大納言殿座敷ごとへ御出でなされ(中略)御酒給べそうらえ」

・「亥の刻」(午後10時ころ)

「大納言殿より夜物語などなさるべきのあいだ、御出でそうらえ(中略)大納言殿御宿中坊へ御出で(中略)子の刻に御宿成身院へ御戻り」

・9月7日

「卯の刻に大納言殿中坊へ御座なされ御食これあり」

「大和に四日の御逗留中、上下人夫馬以下まで、御賄いなど大納言殿より仰せ付けられ(中略)別して御馳走つかまつりそうろう」

・『1588年度・日本年報』 天正16年

「関白殿は日本の重立った諸侯の数名を一部屋に集めた。彼らのなかに関白殿の甥の孫七郎(秀次)殿や、彼の弟である美濃(秀長)殿がいたが、関白殿は彼らに一言短い話をし、次のように述べた。余の死にあたってはおそらく汝らのいずれかに日本の帝国と主権とが移行するであろう。」

→家の後継者候補 秀長と秀次

【参考文献】

渡辺世祐『豊太閤の私生活』創元社、1939年、のちに講談社学術文庫、1980年

日本史史料研究会編『秀吉研究の最前線』洋泉社、2015年

河内将芳『落日の豊臣政権』吉川弘文館、2016年

河内将芳『大政所と北政所』戎光祥出版、2022年

谷徹也「織豊期の京都屋敷」(『近世京都の大名屋敷』文理閣、2024年)

河内将芳『図説 豊臣秀長』戎光祥出版、2025年